

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
在	ザイ あります ます		土部						王勃詩序
地	ヂ ところ		土部						法華義疏
均	ケン ひとしい ならす ととのえる		土部						王勃詩序
坑	コウ あな								
坐	ザ すわる そぞろに		土部						法華義疏

【在】説文解字に「从土才聲」つまり「(意味は)土に従い才の
声(音)」とされる字だが、甲骨文や金文に「才」だけの字形が
あるので、「才」は音だけを表すものではなさそうだ。また、
金文に「土」ではなく「土」と思われる字形がある。つまり、
「才+土」の形声ではなく、「才+土」の会意の可能性もある。

【地】説文解字の大徐本と段注本で籀文の字体が異なる。
【坐】説文解字に「口」が2つのもので「人」が2つのもので
ある。それが干禄字書や五経文字に引き継がれている。漱石
は「坐敷」「座敷」の両方を使うが、「坐る」とは書くが「座
る」とした例はない。太宰は「坐る」として「座る」とは書か

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												在 中国・台湾
												在 香港
地												地 中国・香港
												地 台湾
均												均 中国
												均 台湾
												均 香港
坑												坑 香港
												坑 中国
坐												坐 中国・台湾
												坐 中国・台湾

ないが、「歌舞伎座」、「上座」、「銀座」のような場合は「座」
を用いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
坂	ハン さか	阪	阪	阪	坂	坂	坂	坂	坂
阪	ハン さか	阪	阪	阪	坂	坂	坂	坂	坂
坊	ボウ ボツ へや まち		坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊
堯	ギョウ たかい	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯
堯	人②	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯
坤	コン つじ ひつじさる	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤
垂	スイ たらす たれる	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂

【坂】古代には「坂」と「阪」が両方あった。説文解字は「阪」しか掲載していない。干祿字書は「阪」を〈正〉、「坂」を〈通〉としている。康熙字典は「坂」と「阪」を別々に掲載し、異体字としての説明はない。我が国では「坂」が多く使われ、「阪」の使用例は少ない。大陸中国では「坂」に統合さ

れているが、台湾・香港では「阪」を使う。
【坤】異体字「𡗗」の来歴がよくわからない。干祿字書では「𡗗」を〈通〉としている。「𡗗」はJIS第2水準にあるが、「川」の異体字の扱いである。
【垂】康熙字典は「垂」を正字、「垂」を俗字としている。隸

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂	坂
阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪	阪
坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊
堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯	堯
坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤	坤
垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂

書以来、下部を「山」の形にする字体が多いが、五経文字はその字体を〈訛〉とする。下部が「山」の形になる字は漱石も書いている。明治の漢字は「垂」を標準、「垂」を許容としているが、陸軍では「垂」を正体、「垂」を別体としている。漢字整理案の字典体2と標準体はどこが異なるのかわからな

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

